

## 韓国における児童虐待の研究動向

黄 星 賀

### 〔抄録〕

今日、子どもの人権確立にむけて様々な社会福祉学会、児童学会等の呼びかけが社会的に大きく共感をもつての反響を呼び起こす中で、児童のための権利の追求と深い研究は大きい意味を持っている。児童虐待は、1962年ケンプ(Kempe)が「非虐待幼児症候群」を発表してからその深刻性と重要性について世界的関心が広がってきた。本稿では、1975年から始まった韓国における児童虐待の研究動向を分析し、これからの児童虐待の研究方向と児童虐待の対応との研究課題を考察している。

**キーワード** 児童虐待, 身体的虐待, 精神的虐待, 性的虐待, 児童放任(neglect)

### はじめに

現代社会では、子どもは権利と義務をもった未来の市民である社会においては、弱い存在なので、特別の保護を受ける者として認識されている。しかし、子どもに対する態度は国によって、文化によって多様である。過去の多くの文化は、幼い子供を一個の人とみなしていなかった。古代から近代になるまで高い小児死亡率が容認されていたのは、人びとが児童を殺すことが殺人であるという罪の意識がなかったし、子どもが欲しくないときは親が処理してきた。子どもは親の所有物で、どのように扱ってもよいとする社会風潮があり、現在でもその傾向は残っている。

児童虐待は、アメリカの場合、1960年代以降社会問題として取り上げられた。親の残忍な暴力に悲痛な叫び声を上げる子供たちをすばやくキャッチし、児童虐待のための防止策を実現するために、医療や福祉を専門に扱う機関を設立させ、法的な対策を推し進め、連邦の基金のバックアップを獲得し、つまり公的な政策に組み込ませることに成功した。それ以後、児童虐待は、医療分野や福祉分野、そして州によって取り扱われるべき事柄であるという大方の合意

が成立している(上野加代子, 1992, p.156)。

韓国でも児童に対する虐待及び放任が増加するに従って、様々な社会的対策と関連研究が1980年代後半ごろから進行している。このような児童虐待の研究に対する関心の増加は、児童虐待の結果が子どもの様々な身体的・精神的障害を誘発させることだけではなく、家族関係の解体と社会の病理現象を招来する原因になることによって、社会的対策が要求されたからである。

本稿は、児童虐待の定義と類型について簡単に述べた後、韓国における児童虐待の研究動向を分析し、明らかにされた問題点を把握したい。また、その問題点に対してこれから児童虐待の対応との研究課題を提示する。

## 1. 児童虐待の定義と類型

児童虐待の定義は、その定義が求められる目的に応じて様々であり、一致した定義を求めることは困難である。また、時代と社会および専門分野によって多様であるが、韓国でも児童虐待の定義と範囲に関する論争は引き続き行われている。その中で、一般的に児童虐待を狭義と広義の定義に区別しているが、狭義の定義とは、養育者が児童に加える意図的な行為を意味し、その危害の結果が明らかに出てくる身体的虐待とすることができる。広義の定義とは養育者だけではなく、周囲の全ての環境が児童の発達、また、福祉の保障を阻害する可能性があることとか、現在、阻害している全ての発達領域上の損傷を意味する(Gil, 1970, p.346)。

児童虐待として理解される行為の類型の分類は、同じく学問的立場によって差異点があるが、韓国では普遍的に身体的虐待(physical abuse)、精神的虐待(emotional abuse)、性的虐待(sexual abuse)、児童放任(neglect)の四つの種類と定義されている(ファン・ソンハ, 1995, p.15)。日本でも、日本虐待調査研究会による児童虐待調査では、児童虐待は、親または親に代わる保護者により非偶発的に児童に加えられた以下の四つの行為と定義されている。その種類は身体的暴行(Intrafamilial physical violence)、保護の怠慢ないし拒否(Intrafamilial child neglect)、性的暴行(Intrafamilial sexual abuse)、心理的虐待(Intrafamilial psychological/emotional abuse)である。この分類は、国際児童虐待常任委員会による家族内での児童の不当な扱い(child maltreatment)の定義によったもので、行為そのものよりもその動機に焦点を当て、暴行全般および子への態度の現実的な評定、および、子に与えた身体的、精神的結果の有害度を基礎にした(日本児童問題調査会, 1983)。日本の東京弁護士会子どもの人権と少年法に関する委員会では、図1のように虐待の類型を分けて調査している(日本の東京弁護士会子どもの人権と少年法に関する委員会, 1996)。国際児童虐待予防協会には、家庭内児童虐待、家庭外児童虐待と区別している。ハルペリン(Halperin)は児童虐待を九つに分類し、身体的虐待、性的虐待、身体的怠慢、医療的怠慢、精神的虐待、教育的怠慢、児童遺棄、複雑的領域などと説明している(ホン・ガンイ, 1992)。

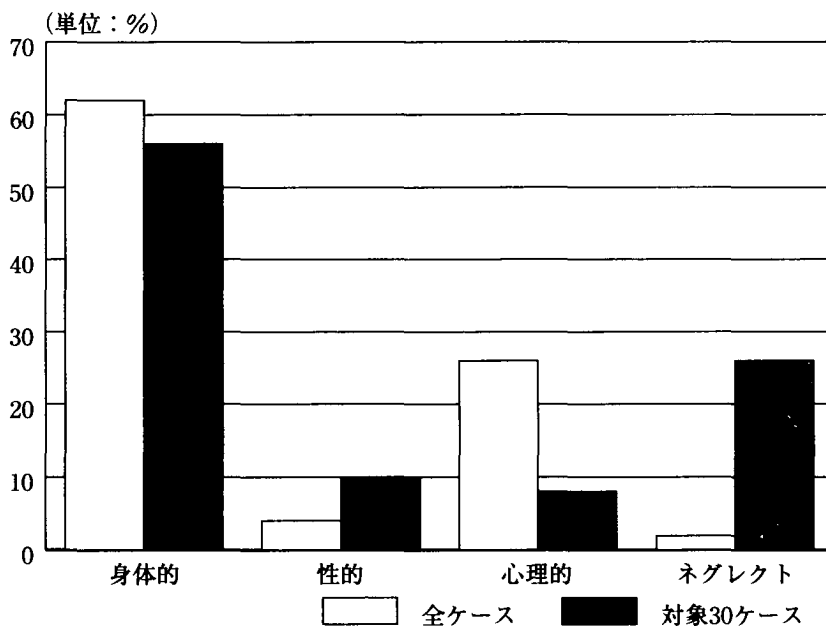


図1 虐待の類型

日本の東京弁護士会子どもの人権と少年法に関する委員会,1996,p.23

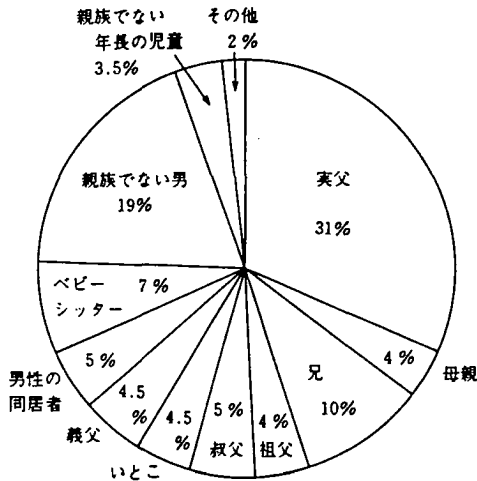
この様々な児童虐待の類型分類を、論者は先に言及した身体的虐待、精神的虐待、性的虐待、児童放任(neglect)の四つ類型の定めて説明をする。

身体的虐待(physical abuse)は、傷あとが残るような暴行、骨折あるいは生命が危うくなるようなけがをさせることであるが、殴る、突き飛ばす、タバコの火やアイロンを押しつける、風呂に押し込んで溺れさせる、首をしめる、冬に戸外に締め出すなどがある。身体的虐待の原因については、家族に係わる多くの社会的、心理的要因も明らかにされた。この原因が深まり、広まり、かさなることによって、虐待が起こる可能性は高いようである。アルコールや薬物の問題、暴力歴、子ども時代に虐待を受けた体験、夫婦の安定性などは大切な要因である。特に、乳児に身体的虐待が集中することは親が虐待された経験があることに、大きな意味を持っている(児童虐待防止協会、1993)。

精神的虐待(emotional abuse)は、子どもの存在を無視したり、声をあびせたりなどして、子どもの心に不安やおびえなどを引き起こすことである。また、極端な心理的外傷をあたえたとされる行為である。ひどい場合には、子どもに強いおびえ、うつ状態、無感動、無反応、強い攻撃性などの精神症状が現れる。精神的虐待の発見は身体的虐待よりも難しく、虐待が始まって何週間、何ヶ月を経て、犠牲者がそれ以上は我慢できなくなって、他人の指摘によって明らかになる。赤ちゃんの場合は発育が遅れ、退行し不安定で活気がなくなる。大人にあやされたり、抱かれるのを嫌がるような行動をする。親に恐れをもつようになった場合、子どもが

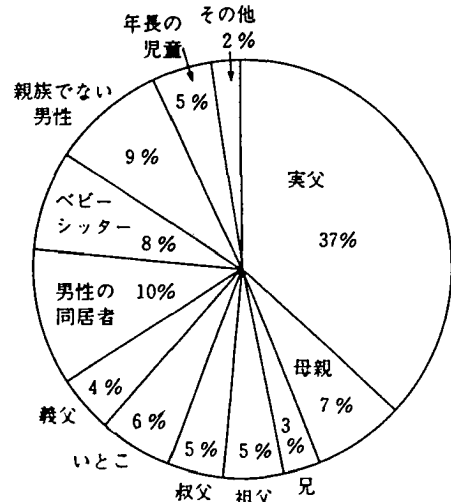
すべての大人を疑うようになる可能性は大きい。

性的虐待(sexual abuse)は、子どもに対し性的な暴力や性行為を行うことであるが、養育者等が強制力を用いて児童の意思に反して自己の性的パートナーとすることをいう。子どもに対する一番多い性的虐待は親による近親相姦である。この虐待をされた児童は性的部分に損傷がある場合が多い。図2および図3は、イギリスの調査報告書(Report of Inquiry into Child Abuse in Cleveland, 1988,CM 412)による性的虐待の類型である。



出典：H.M.S.O., 1988 CM412 p.319

図2 全年齢児に対する性的虐待の加害者 (百分率)



出典：H.M.S.O., 1988 CM412 p.319

図3 六歳未満の幼児に対する性的虐待の加害者

児童放任(neglect)は適切な衣食住の世話をしない、医者を受診させず、放置しておくことである。発育・発達がひどく遅れたり、極端な場合には、栄養失調や脱水症などから死に至ることもあり、家に閉じこめて学校に行かせない登校拒否もある。放任(neglect)された子どもは、知らない人には過度になれなく、皆が注目してくれることを求めるだろう。学齢期の子どもは引っ込み思案になる。また元気がなくなって、学業は振るわず、成績には無関心になる。家族が成功することだけに価値をおき、精神的な欲求を無視する場合は、特にそうである(析木具, 1995)。

このような虐待行為は、子どもの人権を著しく傷害するだけでなく、時には生命までもおびやかしたり、身体に傷を残したりする。後遺症が残らなくても、多くの子どもの心には深い傷となり、人格形成に大きな影響を与える。従って、虐待された子どもが大人になって、また自分の子どもを虐待する悪循環の場合も多い。

## 2. 韓国における児童虐待の研究動向

韓国における児童虐待の研究動向を学問分野の面、研究方法の面に分けて分析する。児童虐待の分析の資料は韓国の修士論文、博士論文、関連学会誌と関連福祉団体のシンポジウム、セミナー資料等を中心とする。

### 1) 学問分野

児童虐待に関する研究は児童虐待の発生原因が多様化し (Faller, 1981 ; Korbin, 1981), 現状の多面的な特性があることから (ユ・ヒョスン, 1977), 社会福祉学, 児童学, 家庭学, 心理学, 教育学, 小児医学, 法学等の様々な分野からの研究が進んでいる。中でも, 韓国では社会福祉学, 医学, 児童学, 家庭学が多数を占めているが, 学問分野の性格によって児童虐待の定義, 範囲, 及び発生原因に対するアプローチに関して観点が異なっている。このことで児童虐待の研究結果を一般化することにやや困難をもたらしている。

韓国での児童虐待研究は, 医学分野からの医者を中心とした臨床報告 (オ・チャンギョン, イ・ミョンスク, バク・テギユ, 1975) が最初であった。その研究から現在, 主に小児医学と精神医学の分野での児童虐待の研究がなされているが (キム・ガンイルとゴ・ボクザ, 1987 ; アン・ドンヒョンとホン・ガンヒ, 1987), 身体的虐待に関する研究が大半を占めている。けれども, 身体的虐待の研究について社会福祉学が, 広義的定義から接近することに比べて, 医学は狭義的定義の観点から接近している。

社会福祉学の児童虐待の研究は, 1977年コン・ウンズが梨花女子大学の修士論文で児童虐待の原因と対策について発表したのが最初である。社会福祉学分野の研究主題は, 児童虐待の発生率 (キム・ミギョン, 1987 ; キム・ヒュヨン, 1990), 児童虐待の発生原因 (シン・ヨンファ, 1986 ; ビョン・ファスン, 1988), 虐待された程度 (ユ・チュンシク, 1988 ; イ・ゾンボク, 1990 ; ホ・ナンスン, 1992), などの把握に集約している。また, 児童虐待の範囲は身体的虐待, 精神的虐待および放任を包含している。最近では, 性暴力問題が社会問題となって性的虐待も関心の主題と登場している (イ・ヨンヒ, 1990 ; イ・ゾンボク, 1990 ; ゾン・ドン Chol, 1990)。この他, 家庭の心理的環境の中, 特に父母のストレスに焦点としてあてた研究 (バク・テゾン, 1990 ; ソ・スキ, 1986), また, 施設内の児童虐待に関する研究 (ゾン・ボイン, 1991), 家庭暴力と児童虐待の関連研究 (キム・ガンイル, 1991) が試みられている。

児童学と家庭学分野では, 家庭環境及び夫婦関係と児童虐待との関係性を重んじる研究が多数を占めている (ゴ・ゾンザとキム・ガッスク, 1992 ; バク・テゾン, 1990 ; イ・ソヒ, 1989 ; ファン・ヨンヒ, 1983)。また児童虐待の発達の特性に関する研究も進んでいるが (チェ・ユンラ, 1988), 児童虐待はたいてい家庭で親によって行われることから, 予防と早期介入が重要視されて児童虐待を確認する道具開発の研究がなされている (イ・ソヒ, 1992)。

教育学分野には、児童虐待の社会人口学的特性(ズ・ヨンヒ, 1984)と共に保育施設の子どもに対する研究が試みられている(キム・ゾンズン, 1986)。争点になる主題は、教育状況での体罰が虐待として認められるのか否かという点である(バク・ソンス, 1990)。また、特殊教育分野からは、障害児童と虐待との関係を研究した報告もある(ベ・ガンフン, 1989; ゾン・ボイン, 1991)。

## 2) 研究方法

韓国の児童虐待研究は、1970年代の後半頃から外国の資料を根幹とする文献研究を中心としてきた(ゴン・ウンズ, 1977; ユ・ヒョスン, 1977)。この文献研究では、児童虐待の定義、範囲、概念、理論的モデル、発生原因、対策等が概括的に行われて、韓国に児童虐待とは何かの研究主題、または研究領域の概要を紹介する契機となった。1980年代は1970年代の研究結果を土台として新しい理論的モデルとか発生原因がより具体的に紹介された。言い換えれば、児童虐待の発生原因で児童側の要因と同時に理論的モデルから発達論的モデル及び生態学的モデルが紹介された。

一方、文献研究による理論的背景の根本を成す部分とし、1980年代初頭には、経験的研究が試みられた(ズ・ヨンヒ, 1984)。これ以降、様々な学問分野から児童虐待の発生率、発生原因などを中心とした経験的研究が引き続き行われた(キム・ミギョン, 1987; ガク・ヨンスク, 1987)。これらの研究は具体的に述べると、医者による病院の例証報告(オ・ハンギュ, イ・ミョンスク, バク・テギユ, 1975)、アンケート調査の臨床報告があり(ギム・ガンイルとゴ・ボクザ, 1987; アン・ドンヒョンとホン・ガンヒ, 1987)、社会福祉学分野の家出児童を対象とする実態調査(キム・ヘヨン, 1990; シン・ヨンファ, 1986; ユ・チュンシク, 1987; イ・ベグン, 1988)、一般家庭の児童を対象とする質問紙法の研究などがあった(バク・テゾン, 1990; ソ・スキ, 1986; チェ・ユンラ, 1988)。また、保育施設の子どもを対象とする面接法を使用した事例研究と(キム・ゾンズン, 1986)、児童虐待の尺度開発を目的とする経験的研究がある(イ・ソヒ, 1992)。中でも、韓国では質問紙による経験的研究が主流を占めているが、質問紙法が持っている限界は一般化することが難しいことである。その理由は児童虐待の定義と範囲およびその基準が学問分野によって異なるからである。

## 3. 児童虐待の研究課題と対応

最近、日本や韓国ではようやく親による子どもの虐待に対する一般的関心が高まり、有効な対策を求める試みもなされつつある。しかし、韓国では、また、図4で表わすことのできる日本の児童相談所のような機関が存在していない。学問的には、20年にわたる、韓国の児童虐待の研究の歴史を持っているが、法的、国家的支援策は整備していない。日本の児童福祉法25条

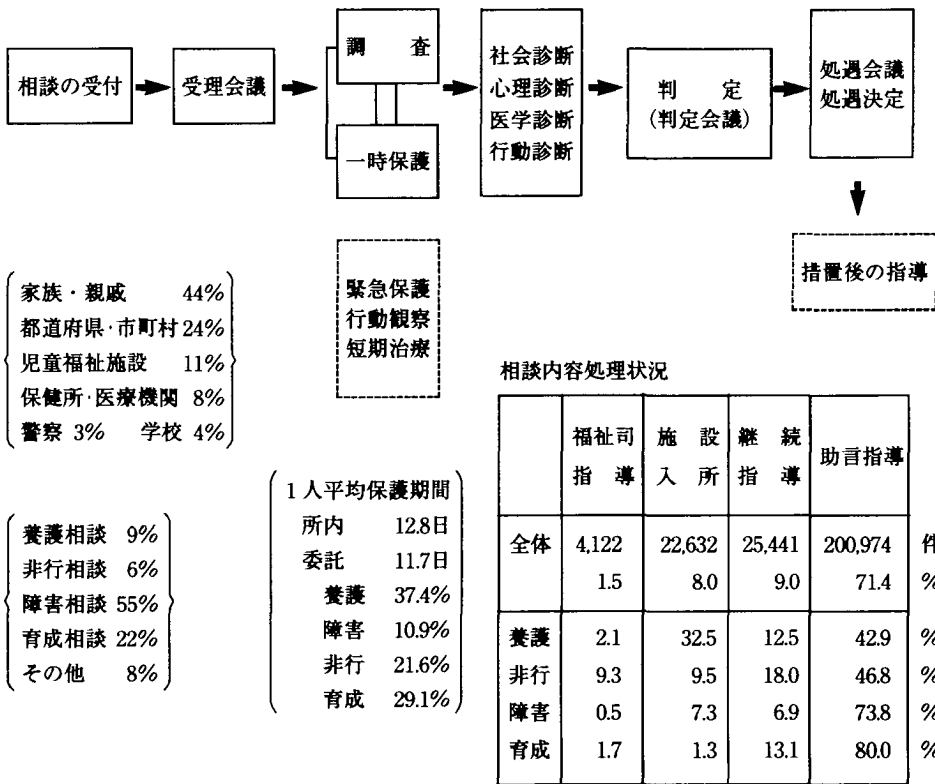


図4 児童相談所における相談援助活動の体系

日本の東京弁護士会子どもの人権と少年法に関する委員会,1996,p.26

は、「被虐待児を含めた要保護児童を発見した者は、誰でもこれを福祉事務所、または児童相談所に通告しなければならない」と明示されている。実際には、虐待は医療機関や保健所、学校、保育所、警察などにより発見されることが多いであろう（津崎哲郎,1997）。しかし、韓国ではこの法律的条項も持っていないのが現実である。

韓国での児童虐待研究の動向を見ると、次のような研究課題を提示することができる。

- (1) 社会福祉学と児童学分野では、巨視的観点から児童虐待の発生原因を模索する必要があると同時に、比較文化圏的研究(Wagatsuma,1981 ; Wu,1981)も必要とする。
- (2) 医学及び心理学分野では、身体的・性的虐待による心理的損傷と精神的虐待について深層心理学的な研究を必要とする。また、虐待された児童のための専門的治療技術に関する研究も必要である。
- (3) 家庭学分野では、夫婦関係、結婚満足度のみでなく家族形態、妻の就職、子供の数などを考慮する必要がある。また、家庭と地域社会との社会的関係網を考慮する研究が必要で

ある。

- (4) 教育学分野でも、教育的体罰に対する限界設定と共に虐待児童の発生を予防する教員教育、親の教育、児童教育に関するプログラムを開発、評価する研究が必要である。また、このような教育分野の研究は、多学際的接近が必要である。(Firestone,1987)。

児童虐待への社会的対応は、予防、発見、通報、介入、保護、指導、治療などの一連の流れに従った統合的な取り組みのシステムが不可欠である。そしてそのシステムの効果的運用を可能とならしめるためには、法律の整備と行政援助の拡充が核にならなければならない。そこでは任意援助、行政介入、司法介入がケースの状況に応じて効果的に配備され、各種機関のネットワークと公・私双方からの多重的サポート体制を必要としている(津崎哲郎, 1997)。

児童虐待への対処の最大のネックは、親権に対する効果的な介入の問題がないことである。虐待を早期に発見すれば、子どもをそれ以上苦しめずにすむし、死なせずに救い出すことができる。児童虐待で、判断の誤りは、子どもの死亡や傷害だけでなく、健康や安全の保持、性欲からの保護、他の養育者による危険からの保護、保護下にある子どもの重い犯罪の防止、などに悪影響を与える(D.N.Jones, 1987)。けれども、児童保護研究への関心は限られているので、支援も限定され、子どもは不幸である。こうした対応は、虐待を警告するサインを見つけ、様々なサービスを確実に調停しつつ、危機に達する前に適切な介入を行なうことを可能にするが、現実にはなお虐待事件が跡を絶たない。虐待のケースは、いわゆる社会福祉モデルに従って処理されるが、子どもを保護する必要があるときは、法の権限を活用することも重要である。

## おわりに

子どもに関する正しい理解と愛情は、現代社会を生きている我々の重要な義務ということが出来る。その理由は、新しい歴史と社会の創造は、子どもたちの肩にかかっているからである。

本稿は、児童虐待の定義と類型について整理し、韓国における児童虐待の研究動向を分析し、現れた問題点を把握した。韓国では、学問分野の性格によって児童虐待の定義、範囲、および発生原因とアプローチに対する観点が違うことで児童虐待の研究結果を一般化することに対して制限を加えている。中でも、韓国では質問紙による経験的研究が主流を占めているが、質問紙法が持っている限界は一般化することが難しいことである。その理由は児童虐待の定義と範囲およびその基準が学問分野によって異なるからである。

従って、その児童虐待の研究に対する問題点に関しては、日本と韓国を比較して、これからの児童虐待の研究課題と対応を提示している。韓国の学問分野の研究課題を述べると、巨視的観点から児童虐待の発生原因を模索しなければならないと同時に、外国との比較文化圏的研究も必要である。また、心理的損傷と精神的虐待について深層心理学的な研究と、虐待された児



童のための専門的治療技術に関する研究も必要である。韓国の児童虐待の予防と対策のためには、児童虐待の発見と申告について法律的申告の義務化と関係法律の制定、親の教育および臨床のプログラム開発、マスコミの広報と援助が必要である。

児童虐待に関するこうした議論がそれなりの意味を持っているのは、家族の信頼性が崩れることや、しばしば個人の主体性や自由性を無効にする契機が潜んでいるからである。今も求められているのは、親と子どものバランスのとれた権利の保障であり、かつ虐待の世代をこえた連鎖を断ち切ることである。個の独立が保障される存在として、児童も社会から人権を尊重される権利があることを認めながら、これからの日本と韓国の児童虐待に対する研究と対策方法は多学際的接近による、多様な研究方法を使用し、社会福祉学、児童学、家庭学、医学、法学、教育学、心理学等が相互に関係させながら、虐待の全領域を分析する研究を必要とする。

#### 参考文献

- 板木具,『子どもの虐待防止ハンドブック』,1995
- 桑原洋子,「児童に対する性的虐待とその制度的対応」,福祉と家族の接点,明山和先生追悼論集,1992
- 児童虐待防止協会,『目でみる児童虐待発見の手引き』,関西テレビ放送,1993
- 津崎哲郎,「変容する家庭と子どもの危機」,社会福祉研究第67号,1997
- 東京弁護士会子どもの人権と少年法に関する委員会,「虐待からの子どもの救出とケアー」,シンポジウム資料,1996
- 日本社会病理学会,『現代の社会病理 VII』,垣内出版,1992
- 日本児童問題調査会,『児童虐待一頁』,1983
- カク・ヨンスク,「児童虐待の概念と原因」,ハンヤン大学精神健康研究5,1987
- ゴン・ウンズ,「児童虐待の原因および対策に関する考察」,イファ女子大学大学院,1977
- コ・ジョンザとキム・ガッスク,「夫婦葛藤が児童虐待におよぶ影響」,韓国児童学会誌,1992
- キム・ガンイル,「家庭暴力と児童虐待」,韓国児童虐待予防協会,1992
- キム・ガンイルとゴ・ボクザ,「児童殴打の発生率調査」,ハンヤン大学精神健康研究6,1988
- キム・ミギュン,「児童虐待と放任」,ソウル市立相談所研究誌,1987
- キム・ゾンズン,「教員が認識された幼児院の子ども虐待に関する研究」,イファ女子大学大学院,1986
- バク・ソンス,「教育的状況における体罰」,児童虐待予防協会,1990
- バク・テジョン,「母のストレスと児童虐待との関係に関する研究」,ヒョソン女子大学大学院,1990
- ベ・ガンウン,「障害児童に対する親の虐待心理と家族力動性に関する事例研究」,韓国児童虐待予防協会,1989
- ビョン・ファスン,「就業母の子ども放置と対策」,韓国子ども財団セミナー資料,1988
- ソ・スキ,「父母のストレスが児童虐待に与える影響に関する研究」,ソンシン女子大学大学院,1986
- シン・ヨンファ,「韓国児童虐待の社会人口および家庭環境的特性に関する研究」,ソウル大学大学院,1986
- アン・ドンヒョンとホン・ガンヒ,「韓国での児童虐待現象」,ハンヤン大学精神健康研究6,1987
- オ・ハンギュ,イ・ミョンスク,バク・テギュ,「非虐待症候群一例」,中央医学28,1975
- ユ・チュンシク,「児童権益報告申告所を重心とする児童虐待現象」,ソウル市立相談所研究14,1987
- ユ・ヒョスン,『韓国行動科学研究所研究ノート』,1977
- イ・ベグン,「児童遺棄の現象と対策」,児童子ども財団セミナー資料,1988

- イ・ソヒ, 「韓国での児童虐待の定義, 範囲, 基準設定のための探索」, ドンガン85, 1988
- イ・ソヒ, 「虐待父母の養育行動の分析研究」, スクミョン女子大学児童研究所, 児童研究7, 1992
- イ・ヨンスク, 「夫婦葛藤と児童虐待」, グンサン大学論文集7, 1984
- イ・ヨンヒ, 「事例を中心とした性的虐待事例分析」, 1990
- イ・ゾンボク, 「青少年の異性交際および性的虐待に対する調査研究」, 韓国児童虐待予防境界5, 1990
- ゾン・ドンチョル, 「中学生の性暴力の実態調査」, 児童虐待予防協会5, 1990
- ゾン・ボイン, 「施設にいる障害児童の虐待事例」, 韓国児童虐待予防協会, 1991
- ズ・ヨンヒ, 「家出児童を対象とする虐待の調査研究」, 韓国社会福祉協議会, 社会福祉80, 1984
- チェ・ユンラ, 「虐待された児童の攻撃性と感情移入に関する研究」, スクミョン女子大学大学院, 1988
- ホン・ガンイ, 「韓国の児童虐待の現状と課題」, 韓国児童学会誌, 1992
- ファン・ヨンヒ, 「父母の結婚満足度と児童虐待の関係」, スクミョン女子大学大学院, 1983
- ファン・ソンハ, 「父母の子女観と養育態度が児童虐待に与える影響」, デグ大学大学院, 1995
- ホ・ナンスン, 「児童虐待の実態および対策」, 韓国児童福祉学, 1993
- Check, Child Abuse, Chelsea House Publishers, New York, 1989
- Faller & Stone, The child welfare system, In Faller (ed.), Social Work with abused and neglected children, New York; The Free Press, 1981
- Fullman, An Evaluation of the implementation of the state of Florida's policy requiring instruction about child abuse and neglect in public schools, Unpublished doctoral dissertation, Florida State University, 1986
- Gil, Violence against Children; Physical child abuse in United State, Cambridge: Harvard University Press, 1970
- Holden, Attitude of school personal toward child abuse and neglect before and after an educational program, Unpublished doctoral dissertation, Texas; Texas University, 1984
- Jones, Understanding Child Abuse, 2nd edition, Published by The Macmillan Press Ltd., 1987
- Korbin, Child abuse and neglect: cross-cultural perspectives, Berkley and Los Angeles: University of California Press, 1984
- Szur, Emotional Abuse and Neglect, In Maher, child abuse, Oxford: Blackwell, 1989
- Wagatsuma, Child abandonment and infanticide: A Japanese case, In Korbin, Child abuse and neglect: cross-culture perspectives, Berkley and Los Angeles: University of California Press, 1981
- Wu, Child abuse in Taiwan, In Korbin, Child abuse and neglect: cross-cultural perspectives, Berkley and Los Angeles: University of California Press, 1981

(ふあん そんは 社会学研究科社会学・社会福祉学専攻博士課程) 1997年10月16日受理